

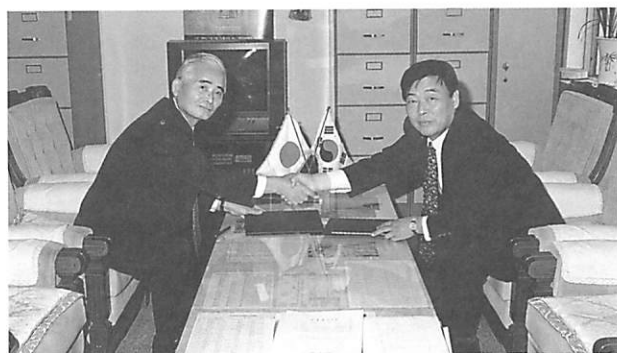
## 国際学術交流

### 1. 韓国国立文化財研究所と姉妹友好共同研究協約書を調印

1999年は韓国の国立文化財研究所が開設されてから、30周年目の記念すべき年である。当研究所と韓国国立文化財研究所とは創立以来、緊密な交流を行い、建築史・保存科学・考古学などの分野で優れた成果を上げてきたが、交流の基本は所員の個人的な研究テーマにもとづくものや、韓国側からの交流要請によって個別散発的に行われてきた。その間に、研究内容をさらに向上させるため、共同研究を両研究所の研究事業に組み込み、組織的な交流形態に発展させるべきだという点で意見が一致した。

11月15～18日の間、筆者は韓国ソウルに招待され、30周年の記念事業として行われた講演会に参加するとともに、協約書の調印を行った。

16日の記念講演会では、はじめに創立時の所長金正基



調印式に臨む町田所長(左)、趙所長(右)

氏が「国立文化財研究所創立30周年記念－回顧と展望」という特別講演を行った後、「21世紀へ向けての文化遺産に関する検討」という共通課題に対して、韓国国立文化財研究所長趙由典、中国社会科学院考古研究所副所長王巍、ロシア科学アカデミー・シベリヤ支部・考古学民族学研究所Andrei V. Novikovの諸氏とともに筆者も基調報告を行い、その後に韓国の文化財関係者を交えての意見交換会を行った。

17日、韓国国立文化財研究所に赴き趙由典所長と協約書の調印を行い、これから始まる共同研究の将来を交互に祝福した。その全文は以下のとおりだが、当研究所としては研究事業の一環として予算措置の裏付けを行い、実りある共同研究を行う義務が生じたことになる。(町田 章)

#### 日本国奈良国立文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所 姉妹友好共同研究協約書

日本国奈良国立文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所は、日・韓両国における学術、文化交流と親善及び両国文化の共同研究を目的に姉妹友好関係を結ぶことに同意する。

この協約書の定めるところにより、両研究所の研究者は互いに理解と友好関係を深くし、学術情報の交換ができるよう努力する。

#### 第1条

日本国奈良国立文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所は、相互の学術研究の進展に資するため、共同して研究を実施する。

- (1) 両研究所研究者の相互訪問及び研修、研究の機会を提供するのに必要な便宜を図る。
- (2) 両国の研究の進展状況を鑑み、適切な研究課題を設定し、それに応じた事業計画を立案・実施する。
- (3) 両研究所主管の遺跡発掘に参加し、研究すること。
- (4) 発掘成果及び新発掘技術、設備等に関する情報を相互に交換すること。
- (5) 両研究所及び両研究所に関連する他機関の学術資料を交換すること。
- (6) その他相互に必要な事項。

#### 第2条

第1条以外の活動については、両研究所の合意にもとづいて、実施すること。

#### 第3条

交換された学術情報・資料を利用するときには、所有する国の関連法規を遵守する。

#### 第4条

研究成果は、原則として双方の合意により同時に公表する。

#### 第5条

この協約書にもとづく共同研究を中止する場合は、相手方に対して書面で通知し、その翌年から中止となる。

#### 第6条

この協約書は、等しく正文で日本語及び韓国語の各2通、本書4通をもって作成し、双方の協約書は同等の効力を有する。

#### 第7条

本協約は、双方が署名した後有効とする。

1999年11月17日  
奈良国立文化財研究所長  
町田 章 (署名)

1999年11月17日  
大韓民国国立文化財研究所長  
趙 由典 (署名)

## 2. 国際学術交流の現状

特別研究として実施した学術交流ではまず、次の2件をあげることができる。1) アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力、2) 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する特別研究である。前者では、漢長安城の宮殿遺跡の共同発掘調査を行っている。桂宮二号宮殿の発掘調査では、正殿・後殿が南北に並ぶという、漢長安城でも類をみない構造であることが判明するなど、注目すべき成果をあげている。本研究は、こうした発掘調査ばかりでなく、中国側から研究者を招聘し、所員との共同研究会、さらには広く市民にも開放した講演会も逐次開催している。また本研究の一環として、遼寧省北票市大凌河北岸の東西にのびる丘陵の南斜面に位置する喇嘛洞(ラマトン)遺跡についても調査している。3世紀末から4世紀にかけて、300基をこえる鮮卑族の墓がかなりの規則性をもって築かれており、その構造や時代的変遷を考察した。これを支援する形で、出土遺物の分析や保存処理について研究協力を行った。

後者の共同研究は5年目を終えた。ミャンマー連邦文化省考古局との共同研究で、古代寺院・都城遺跡の発掘と保存整備に関する意見交換を行う一方、現地では各種遺跡の調査・整備状況の調査を実施した。

また、3) 苛酷な気象条件における遺跡保存の研究では、文化庁が計画した、アンコール文化遺産保護共同研究を継続して実施している。遺跡探査・写真測量・発掘調査技術・石造建造物の劣化対策・修復技術・広域遺跡整備の6項目の課題を掲げて協力している。他方、チリ領イースター島におけるモアイ石像の保存協力に関しては、チリ国立文化財保護センターとの共同研究で、モアイ石像の火山性凝灰岩の強化方法など、その材料と施工技術の共同研究を実施している。

さらに、文部省科学研究費補助金を得て、次の3件の共同研究を実施している。4) 唐代古墳壁画の転写・輸送・保存修復に関する科学的研究では、壁画顔料の材質分析・壁体強化法・保存環境調査などの総合的な共同研究を行っている。中国側の研究代表となる陝西歴史博物館では、考古学・保存科学・保存修復などの専門家を擁した「唐墓壁画研究中心」を立ち上げ、共同研究がいちだんと進め易くなった。5) アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究では、スミソニアン研究機

構・フリーヤー美術館の陶磁器コレクションを研究対象とし、化学分析的共同研究を展開している。6) 日韓古代における埋葬法の比較研究では、日本と韓国の先史時代以来の埋葬法を比較することにより、祖先に対する観念や思想の共通性又は異質性を、各時代をととして共同調査を行った。

なお、当研究所における海外との人物交流は、平成11年度では、招聘者は11ヵ国51名、派遣者は17ヵ国延べ80名であった。ちなみに、平成10年度では招聘者は11ヵ国65名、派遣者は18ヵ国で延べ84名であった。国際交流が研究所の重要な事業のひとつとなることが予測され、本格的に取り組む体制づくりがいよいよ必要になろう。

(沢田 正昭)

## 3. 中国社会科学院考古研究所との共同研究

当研究所では特別研究「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」の一環として、中国社会科学院考古研究所と共同研究を進めている。

昨年度までは漢長安城桂宮2号宮殿の調査を2年度にわたって行い、桂宮正殿と目される大規模な宮殿遺構を明らかにするという大きな成果をあげた。99年度は桂宮の3次調査として、3号建築遺跡の調査を行った。3号建築遺跡は2号宮殿の北約1.2km、西50mの位置にあり、桂宮北半部に対しての初めての発掘調査となる。

調査は1999年秋と2000年春の2回に分けて行い、秋は2名、春は3名の研究員をそれぞれ派遣した。調査の結果の詳細については本書6～7頁を参照されたいが、この遺構は南北に約40m離れて並ぶ2基の基壇建物の間に、東西に長い倉庫が7基並ぶという構造をもち、ボーリング調査の結果では東方にさらに付属施設があることが判明した。こうした倉庫遺構は、これまで漢長安城では武庫の調査例があり、それとの比較検討も興味ある課題であるとともに、今回の調査成果は桂宮の性格や構造を知るために、貴重な材料を提供したといえよう。

また、今回は発掘区全面にわたって、5m方眼の基準線をトータルステーションを用いて張り、遺構実測を行った。こうした実測方法は中国での調査では通常採用しないものであり、調査成果の正確な記録という新たな試みとして評価できよう。

1999年夏には劉慶柱所長、李毓芳漢長安城考古隊長を

はじめ、6名の考古研究所研究員が来日して意見交換をするとともに、李研究員による桂宮2号宮殿の調査に関する講演会を開催した。なお、春から秋にかけては展覧会「よみがえる漢王朝」を、主催者の一員として日本の4都市で開催した。それに関連して、4月に記念シンポジウム「漢王朝と日本」を、劉慶柱所長、白雲翔研究員を招いて平城宮跡資料館講堂で開催した。

漢長安城桂宮を対象とした共同研究はもう1年で一応の終息をさせることとなり、2000年度は桂宮各所におけるボーリング調査や、トレンチによる補足調査を行うこととなった。その後、報告書の刊行に向けて準備を進めることを確認した。また、2001年度以降の新たな共同研究に対しても協議を持ち、その対象地について具体的な選定作業を行いつつある。（玉田芳英／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

#### 4. 遼寧省文物考古研究所との共同研究

三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究を課題とした、遼寧省文物考古研究所との共同研究は、三燕時代の鮮卑族の墓地である喇嘛洞遺跡から出土した金属器を主たる対象としている。

喇嘛洞遺跡では、1998年の第5次調査をもって、墳墓435基すべての発掘調査が終了しており、現在は、報告書作成に向けて、遼寧省文物考古研究所において、出土遺物の整理と鉄製品を中心とした保存処理が進められている段階である。

出土遺物は、青銅製品、鉄製品、金銅製品と土器類であるが、その特徴の一つとして、鉄製農具等にみられるような漢文化の影響と、馬具等で示される騎馬文化の要素が共存している点があげられるであろう。青銅四環鈴の出土とともに、両要素の共存には、韓半島・日本列島における古墳副葬品との共通性がうかがわれるのである。

今年度は、奈文研側が遼寧省に赴き、喇嘛洞遺跡から出土した金属器のうち鉄斧、鉄鎌を中心に、一昨年度と同様、写真撮影と実測調査を行った。

鉄斧には鑄造製と鍛造製があり、その形態はヴァラエティに富むが、基本的には、漢代の系譜を引くものである。そのなかで、袋部に突帯を有する形式は、日本列島においても弥生中期にみられるものである。また、鉄鎌には、大別して、重量20g前後の方頭鎌と重量10g前後の細根鎌があり、ともに、日本の古墳出土品にみられるも

のである。

なお、10月と12月には、遼寧省文物考古研究所から研究員が来日し、出土遺物に関する日中の比較検討を行った。（小林謙一／埋蔵文化財センター）

#### 5. ミャンマー考古局との共同研究

ミャンマーでは近年、施釉陶器の窯跡の調査が急速に進んでいる。ミャンマー陶器は東南アジア一円はもちろんのこと、一部は日本へももたらされているが、その実態はあまりよくわかっていない。奈文研が行っているカンボジアでの窯跡調査とも関連して資料収集が必要なため、1999年9月20日から22日にバガンで開催された「東南アジア施釉陶器学会」へ1名を派遣し資料収集を行った。会議開催前日にはトゥワンター地域の発掘調査中の窯跡や、踏査で発見された窯跡の見学を行った。

2000年1月12日から1月24日にかけて奈文研から4名をミャンマーへ派遣した。まず、アラカン地域の都市遺跡について、現地踏査と資料収集を行った。ミャウー近郊の遺跡を中心に見学し、なかでも1世紀に遡る都市とされている、ダンニャワディとそれに続く王都とされ再発掘が計画されているヴェーサリについては、詳しく踏査を行った。他の地域では、完了が近づいて落ち着きつつあるバガン地域の復元整備事業の見学、青銅器文化の埋葬遺跡で、昨年に続いて発掘調査が行われているニャウンガン遺跡の見学、ザガイン近郊で土器作りの様子を見学などを行った。ニャウンガン遺跡は遺跡博物館として、発掘区をそのまま保存展示する構想があり、今後の整備が注目される。また古代からの技術を継承していると考えられる土器作りの工程を、詳しく見学できたことも収穫が大きい。今回の資料収集で都市遺跡、仏教遺跡以外の分野でもミャンマーとの共同研究が有益な情報をもたらすことが、改めて明らかになったと言える。

ミャンマー考古局ミャウー事務所のチー・キン研究員を、1999年12月8日より12月26日まで招聘し、平城宮跡発掘調査部の協力を得て、長屋王邸での発掘調査実習の他、ミャウーに多い石造物があり比較研究が可能な沖繩などの遺跡見学を行った。チー・キン氏は帰国後、ヴェーサリ遺跡の発掘調査に従事する予定である。氏は日本の発掘調査法、特に遺構実測、断面図作成について奈文研研究者との共同作業ができ、たいへん参考になった

との感想を持たれていた。考古学研究者の継続的招聘により、国策で急速に発掘調査が行われているミャンマーでの考古学の発展に、いくばくかでも寄与できれば幸いである。

(森本 晋／埋蔵文化財センター)

#### 6. アンコール文化遺産保護に関する研究協力事業

文化庁伝統文化課の所管で開始された表記事業は、平成11年度より、奈文研単独の事業として引き続き実施されることになった。

当該事業はこれまで3年を1フェイズとする中期計画のもとに、事業の推進に当たってきた。平成11年度から13年度の第3フェイズでは、実際に現地の遺跡をカンボディア側と共同調査をし、調査技術の移転を計るとともに、発掘調査から遺跡の保存・公開に至る一連の過程を、現地で実施することに主眼をおいた。1995年に発見され、その保存と調査が緊急の課題となっていた、タニ窯跡群に設定し、平成11年度からその発掘調査を開始した。8月と2月に現地調査を行うとともに、その成果を12月の国際会議で発表した。一方カンボディア人若手研究者の招聘を、10月14日から12月11日の60日間実施した。これらの成果は、当該年度に作成した『アンコール文化遺産保護共同研究 平成8年度～10年度』と『アンコール文化遺産保護共同研究 タニ窯跡群A6号窯発掘調査概報』に詳しい。

(西村 康・杉山 洋)



タニ窯跡群A6号窯 発掘調査風景

## 在外研修の成果

### 唐日陶磁の比較研究

巽 淳一郎／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1999年10月1日～12月19日の間、受け入れ機関の陝西省考古研究所を拠点に、中国唐代の陶磁の見分と、それに関する情報を収集した。ここでは奈良三彩と深い関係にある唐三彩に関する新知見の一端を紹介しよう。

唐三彩の窯場として知られる陝西省銅川市黄堡鎮窯・河南省鞏義市黄冶窯・同洛陽市洛陽城内窯・河北省内丘県邢窯の4箇所その他、長安城禮泉坊内で窯が新発見され、陝西省考古研究所によって調査が行われている。

唐三彩には、白色瓷土を胎とするものと、紅色胎に白化粧を加えた素地の両種があり、後者の窯場は未確認であった。実は、禮泉坊内窯では専ら後者の素地を用いた唐三彩が焼造されている。生産器種は、小型の日常什器・小型甕・僧形甕などで、陝北の皇陵陪葬墓に納められた大型甕等はみかけず、同時に緑釉・褐釉・黒釉・白釉・彩陶の日常什器も焼成しており、官窯ではなく、長安城内西部の住民の需要に応じた民窯と考えられている。

### 食器組成に関する研究

安田龍太郎／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1999年8月2日から10月10日にかけてギリシャ・トルコ・エジプト・イギリスを訪れた。アナトリア西部・エーゲ海沿いの遺跡と博物館を訪れ、食器・台所用具を重点に調査を行った。

新石器時代からローマ時代にいたる土器のうち圧巻は紀元前6～4世紀のギリシャ陶器である。様々な生活場面の描かれる黒絵・赤絵が、日本の絵巻物のように当時の社会復原に貴重な資料であることを実感した。食器は用途に対応し形態が異なり、名称が決っていた。アテネのアゴラなどで出土した台所の土器には、フライパン、煮炊き用の鍋・釜、移動式のカマド、方形・円形のグリルなどがある。グリルは中国の新石器時代の炉竈と類似する。片手付の釜には同形態で大小何種類かがあり、器種分化に通ずる。イギリスの博物館ではローマ時代の立体的な展示が盛んであり、台所の復原展示を何カ所かで見ることができた。今回の研修で、食文化の相異による食器の違い、土器が社会で占める重要性を再確認した。